第4章　白河の条坊地割

浜崎一志

1　はじめに

「天狗ありなどいひし所」[1]といわれ，鄙びた場所の代名詞であった白河（現京都市左京区吉田・岡崎一帯）の開発が進んだのは，11世紀後葉のことである。白河天皇の法勝寺の造営(1077年)を皮切りに，堀河天皇が尊勝寺(1102年)を，鳥羽天皇が最勝寺(1118年)を，待賢門院璋子が円勝寺(1128年)を，崇徳天皇が成勝寺(1139年)を，近衛天皇が延勝寺(1149年)を，つぎつぎと造営したためである。この6寺は「六勝寺（りくしょうじ）」と総称され，「国王の氏寺」[2]としてその栄華を誇ったが，この六勝寺以外にも白河北殿・南殿などの院の御所や，公家の邸宅，および得長寿院，蓮華蔵院，金剛勝院，証菩提院などの諸寺院の建立が続き，この地の様相は一変し，「京白河」[3]と洛中と並び称される白河の街区が出現した。

白河の地のこうした都市的発展にともない，洛中と同様に格子状の条坊地割が施されたと考えられている。[4]近衛末，大炊御門末，春日末など洛中の大路小路の名称に，「末」をつけた道路名が文献に現れることや，愛宕郡の条里が東に5～6°振るのに対し，白河一帯では遺構の方位が六勝寺などと同じほぼ真北を示すことをその根拠とする。

しかし，白河の条坊地割の範囲，方位，造営尺，大路小路の幅員などの詳細は不明である。解明が困難な理由として，六勝寺の存続期間が短かかったこと，近代に白河一帯が大規模に開発されたことなどがあげられるが，いまひとつ，整合性のある全体計画の無いままに条坊地割が施されたためである可能性を指摘したい。すなわち，白河の条坊地割は，六勝寺の造営にともなって漸次進められたもので，区画の大きさや，大路・小路の幅などに不整合な部分があった可能性がある。法勝寺が2町四方におさまらないことや，延勝寺が白河の条坊地割の中心街路である今朱雀を分断していることなどはその不整合な面を示し，また，大治2(1127)年，法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは，[5]条坊地割の実施が長期にわたって行なわれていたことを裏づける。こうした状況が白河の条坊地割の復原を困難にしていると考えられる。

本稿では六勝寺の伽藍配置の詳細な復原を論ずるのではなく，白河の条坊地割の復原に主眼をおいて考察を進める。条坊地割の復原は，文献だけでなく，近年多くの成果を上げてきた，六勝寺関係の遺構と，京都大学構内で検出した溝や道路遺構をもとに試みた。

2　白河御堂の遺構

六勝寺を中心とした白河一帯の発掘調査は，六勝寺研究会，京都市埋蔵文化財センター，奈良国立文化財研究所，京都市埋蔵文化財研究所，京都府埋蔵文化財調査研究センターなどの調査組織により実施され，大きな成果が上がっている。ここでは，白河の条坊地割復原の基礎となる六勝寺や院の御所などの遺構について考察する。

(1)　はじめに法勝寺ありき

法勝寺は当初，藤原家累代の別業であった。関白藤原頼道の死後，その子の左大臣師実が白河天皇に献上し，その地に白河天皇が造営したのが法勝寺である。法勝寺は西大門を二条大路末に開き，金堂の南庇は二条大路の北辺に当たり，阿弥陀堂の南端が押小路末の北辺にあたることが指摘されている〔福山43〕。また，八角九重塔の位置は地籍図から〔西田25〕，金堂とその回廊は発掘調査〔杉山・梶川75，梶川76，辻・上村87〕により明らかにされている。

法勝寺の西辺は，車道（くるまみち）（現在の岡崎通）を限りとする可能性が高いとされていたが，動物園医療・救護センター建設にともなう調査（図21—A地点）で検出した南北方向の側溝[6]がこれにあたると考えられる。東辺については，車道より東へ約270ｍの所（図21—B地点）で，池の東の汀線が発掘されており〔杉山ほか75〕，寺域の東西幅は2町より広く，この地点までおよんでいたことが判明した。法勝寺の東面は，他の3面のように門や築垣がなく，土手を築いただけであったことが指摘され〔福山43〕，また，「塔ノ段及池ノ内町水田低地図」〔西田25p.28〕には低湿地の中に，帯状の高地が南北に続いていたことが報告されている（図21梨地部分）。この部分が法勝寺の東を限る堤と小路にあたると考えられる。図21—C地点における発掘調査[7]はこの小路の存在を裏づけた。12世紀後半の遺物を大量に含む幅2.2ｍ，深さ0.7ｍ，断面逆台形の南北溝と，鎌倉時代の遺物を含む南北溝を検出した。この2本の溝は，心々で約9ｍの距離をとりながら並行するが，位置的には前述の帯状の高地の延長部分にあたり，法勝寺の東を限る小路の一部にあたると考えられる。

法勝寺の北限については冷泉小路末を限りとする福山説〔福山43〕と，冷泉小路末の北におよぶとする西田説〔西田25〕，林屋説〔林屋60〕がある。福山説は金堂・講堂・薬師堂を適当な間隔をもって配置すれば冷泉小路末を北限とすることができるとする。これに対して，林屋説は冷泉小路末を北限とすると，金堂・講堂・薬師堂の間隔が狭くなるのと，南限が押小路末よりも南まで及んでいることから，二条大路末に面した西大門を中央とし，

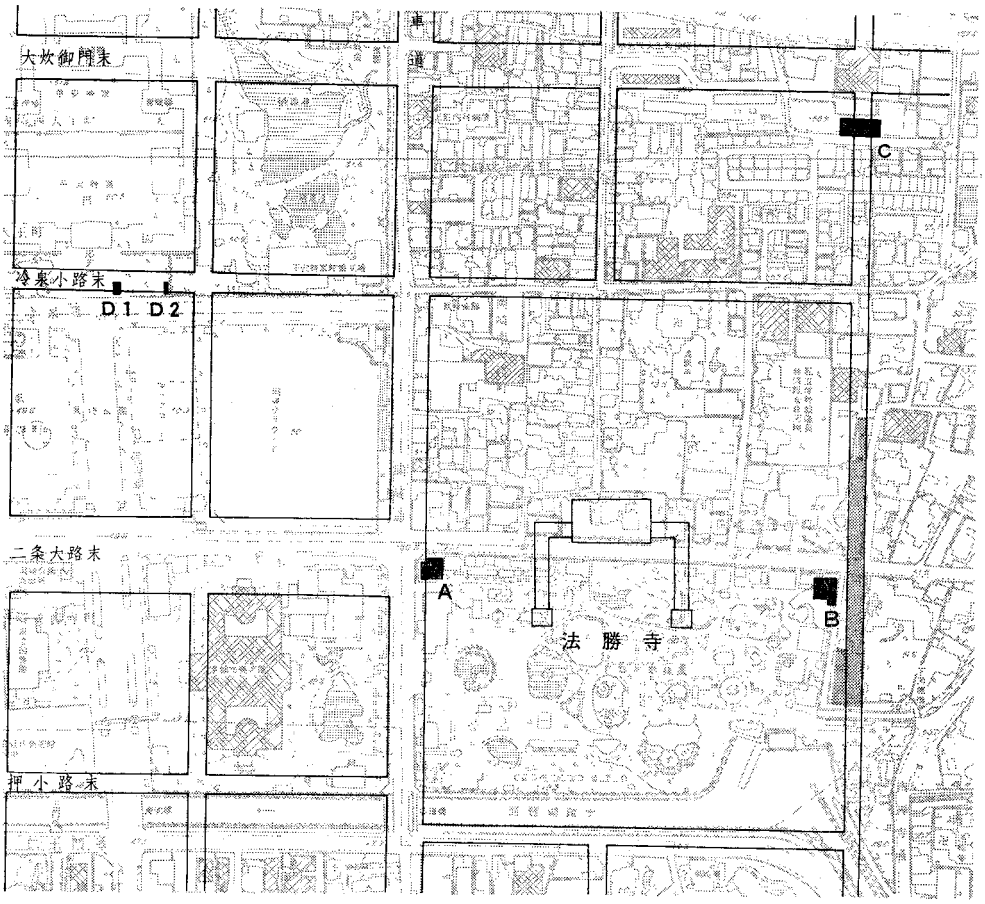


図21　法勝寺の寺域の推定図　縮尺1/5000

北限も冷泉小路よりも北におよぶとする説である。しかし，図21—D1地点の発掘調査〔梶川77b〕で冷泉小路末の延長部分にあたる東西に続く築地塀跡と，その北側の幅約2.6mの溝を検出した。D1地点の東約30mのD2地点でも同様の築地跡と溝を検出しており，築地と溝が東西に連続していることを確認している。この結果，現在の冷泉通は岡崎通（車道）を境に南北にずれているが，本来は一直線の冷泉小路末であったと思われ，したがって，法勝寺の北辺も福山説と同様に冷泉小路末であったと考えられる。

なお，D地点の遺構は築地の幅2.4m，犬走り3m，溝2.6mを測り，これを小路の幅に収めると道路部分がかなり狭くなる。当時，二条大路末を東に直行して法勝寺に御幸することは憚るべきこととされている[8]〔福山43〕。冷泉小路末はその迂回路として頻繁に使用されており，この道の幅が小路より広かった可能性がある。

以上の復原結果をみると，法勝寺の東西幅は約278ｍと，２町＋小路の幅84丈(約252ｍ)を大きく逸脱している。南辺も押小路末よりも南にはみでており，白河の条坊地割が施行される前に法勝寺の寺域が確定されていたものと考えられる。逆に，二条大路末や法勝寺西大路(車道)，冷泉小路末が法勝寺の寺域に合わせて設定され，白河の条坊地割の起点になった可能性が高い。大路・小路の末が洛中に比して，ずれていることがこれを裏付ける。

(2) 尊勝寺の寺域の設定

尊勝寺の比定地において本格的な調査が実施されたのは，1959年のことで京都会館建設にともなうものであった〔杉山・岡田61〕。以後の多数の調査により，金堂，回廊，西の築地塀，観音堂，五大堂，東塔，西塔などの位置を確認した。ここでは伽藍配置の詳細な検討は省略し，寺域について検討したい。

尊勝寺の寺域の西辺については，図22—A地点で検出した溝と築地跡と思われるマウンド状の遺構がこの西辺にあたる〔梶川77ａ〕。1975年に，六勝寺研究会が疏水と並行する冷泉通の北側で検出した築地跡と考えられる遺構も，尊勝寺の西辺を限るものであろう。南辺は「承保勘文」から二条大路北辺が法勝寺金堂の南庇にあたることが指摘されているが〔福山43〕，二条大路末が二条大路の延長線上にあるかどうかは確証がなく，また，二条大路末の遺構も検出しておらず，二条大路末の北辺すなわち尊勝寺の南辺の位置は不明である。

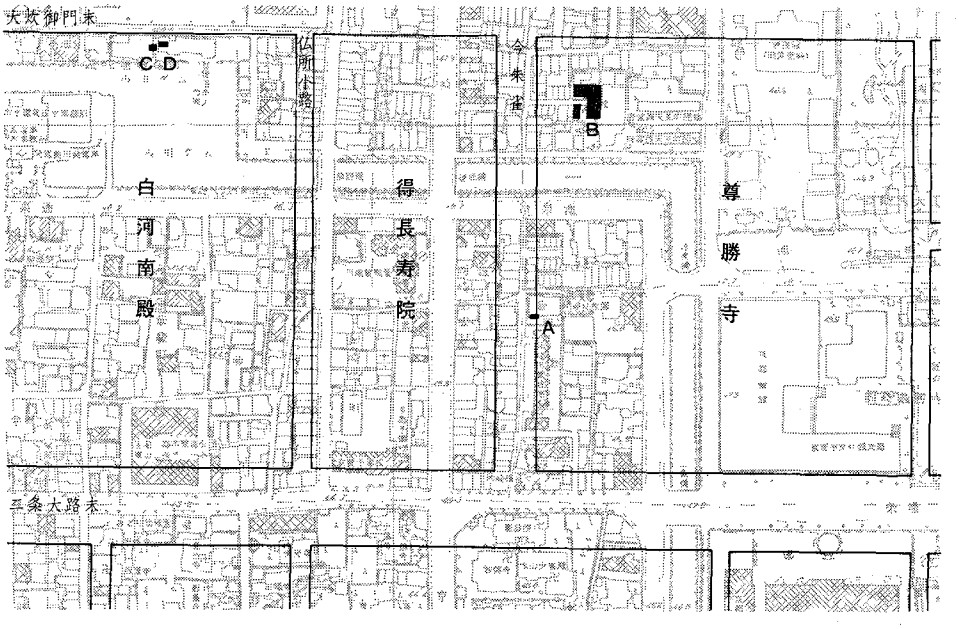


図22　尊勝寺の寺域の推定図　縮尺1/5000

尊勝寺の北辺については，図22—B地点で検出した幅約3.5m，深さ1.3～1.4mの断面逆台形の溝[9]が，尊勝寺の北を限る可能性がある。しかし，この位置に大炊御門大路末を想定すると図22—C地点[10]と図22—D地点〔上村83〕か検出した基壇をもつ平安後期の建物が，大路の中央に建てられていたことになり，北辺と推定するには難がある。

尊勝寺の西辺から法勝寺の西の築地までの距離が約534mを測り，4町の街区がちょうど納まることから，尊勝寺の東辺は西辺から2町(80丈)と小路(4丈)の位置にあると考えられる。なお，4町の街区がちょうど納まることから，尊勝寺の計画段階で条坊地割が意識され，将来の寺院などの造営に備えたものであったと考えられる。

(3) 白河北殿と白河南殿

白河南殿は白河法皇が，法勝寺の西方に造営したもので，もとは覚円大僧正の房であった。何度か修造がおこなわれ，「泉殿御所」「白河泉殿」などとも称されていたが，南殿の中に建立された2棟の九躰阿弥陀堂に対し，「蓮華蔵院」と称されるようになった。この白河南殿の建物と考えられる遺構はいくつか検出されているが，寺域を示す遺構は検出されていない。しかし，現在も東西・南北がほぼ2町の聖護院蓮華蔵町(図23梨地部分)の地名が残り，蓮華蔵院を含む白河南殿の範囲がこれにあたると考えられている〔杉山62〕。

白河北殿が造営されたのは元永元(1118)年のことである。『保元物語』に「大炊御門ヨ

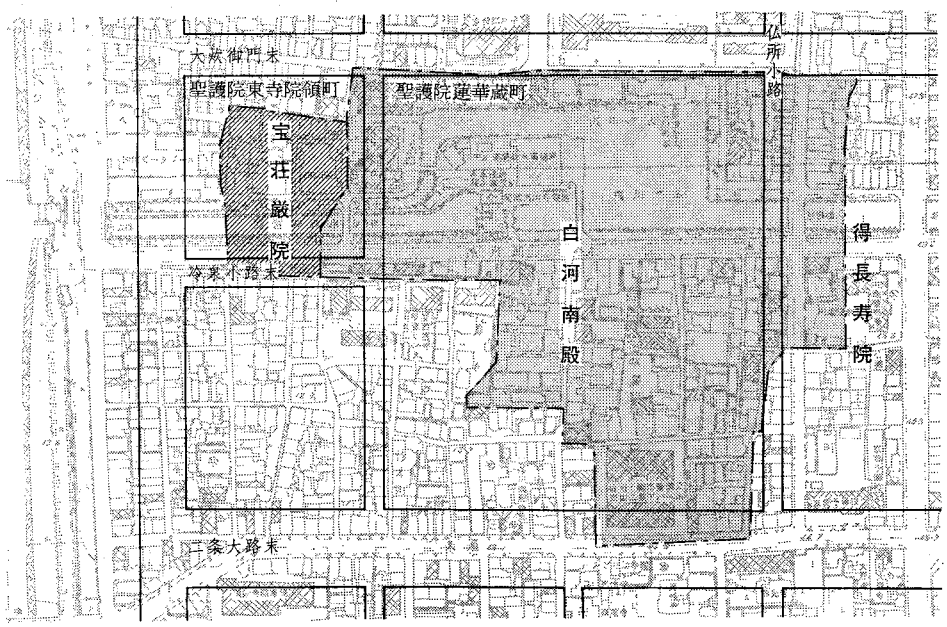


図23 白河南殿と宝荘厳院の推定図 縮尺1/5000

リハ北、川原ヨリ東、春日ヲカケテ作タル御所也」[11]とあり，その範囲は南は大炊御門末，北は春日末で南殿の北にあったと考えられているが，大治4（1129）年の改造で中御門末まで拡張された可能性が指摘されている〔川上77〕。

(4) 宝荘厳院と粟田の宮

宝荘厳院の建立は長承元(1132)年のことである。九躰阿弥陀堂や寝殿のあったことが知られている。宝荘厳院の位置については，この寺領が東寺に伝領されたことから，白河南殿の比定地のすぐ西にあたる聖護院東寺領町(図23斜線部分)がその旧地に比定されている〔杉山62〕。こうした状況を裏づけるものに，「宝荘厳院用水事」という延文元(1356)年の絵図[12]がある(図24)。この図は宝荘厳院の農民が，鴨川の上流から粟田宮のすぐ西を経由して，農業用水を引き入れていた様子を示す。延文元(1356)年ごろに洪水が続き，粟田宮が洪水被害をこの用水によるものとし，相論となった際のものである〔西岡76〕。

この図を見ると，大炊御門末の南と北に宝荘厳院と記され，この時期の宝荘厳院の領地は大炊御門末よりも北の春日末までおよんでいたことや，宝荘厳院が鴨川に面していたことがわかる。

宝荘厳院の北の粟田宮は，保元の乱に敗れ，讃岐で流刑死した崇徳院の霊を鎮めるため，後白河法皇が寿永3(1184)年に創建したものである。この宮は嘉禎3(1237)年に一度遷座したうえ，応仁の乱後に荒廃し，その後やや離れた所に再び祀られたため，その旧地の比定に混乱が生じている。当初の社地を『吉記』[13]は春日河原の白河北殿の跡とし，『源平盛衰記』[14]は春日末の北，河原の東とする。白河北殿の位置から，粟田宮の社地は春日末の北か南で，河原に近い所といえる。しかし，白河北殿の跡地には鳥羽法皇追善のための千躰阿弥陀堂が，粟田宮よりさきに造営されており[15]，また，白河北殿より河原よりに比定されている宝荘厳院も，少なくとも承久3(1221)年の火災までは堂舎が残っていたことから，粟田宮の初期の社地は春日末の北で，河原に近い所

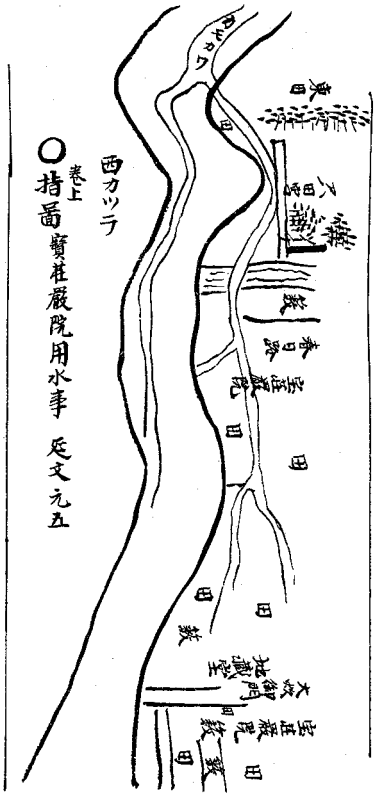


図24 宝荘厳院用水事
(『東寺古文零聚』所収)

と考えられる。

嘉禎3(1237)年，粟田宮が鴨川に近く，洪水の被害をうけやすかったため，やや東へ遷座した。[16] 図24は遷座後の粟田宮の様子を示している。この図を見ると，粟田宮は春日末の北にあり，東へ遷座したというものの，その位置は鴨川に近く，距離的にはあまり動いていないことがわかる。また，この訴訟に関連するものとして宝荘厳院の所司らが，以前のように用水路の設置を認めるように訴えたときの文書がある。[17] このなかで粟田宮の洪水被害が用水路によるものではないことを「去今両年之洪水者、越河原大堤、浸東西高岸畢、必不限彼一所」と述べている。この文書からも粟田宮は河原の大堤より東であったものの，一段高くなっていた高岸より西にあったことがわかる。このほか，天理図書館吉田文庫の『粟田宮文庫』に，寿永3(1184)年の「粟田宮御敷地境内事」，応永33(1426)年の「粟田宮神領所領目録」，嘉吉元(1441)年の「粟田宮々地四至目録」がある。これらの文書は粟田宮の北を中御門大路，南を大炊御門，東を女院高岸，[18] 西を河原とし，南限以外は図24とよく一致している。北限を中御門末，西限を河原とすることに異論はない。東限の女院高岸は，前述の洪水で浸水した高岸と同じものと思われる。なお，病院構内で医療技術短期大学部校舎新営にともない実施した発掘調査で，平安中期の高野川系旧流路の護岸を検出している〔岡田・宇野78〕。女院高岸は少なくともこの発掘調査地点より西と考えられる。

以上の結果から，嘉禎の遷座は粟田宮の敷地内を移動した程度にとどまるものと考えられる。そして，粟田宮は創建当初も嘉禎の遷座後も，春日末の北，中御門末の南で，鴨川の堤防と，本来の河岸であった高岸のあいだの後背低地にあったと考えられる。度重なる洪水被害もこうした状況を裏づける。

3　京都大学構内で検出した遺構

(1)　教養部構内ＡＰ22区溝ＳＤ10

教養部構内ＡＰ22区(図25—Ａ地点，図26上段)で道にともなう溝ＳＤ10，四脚門ＳＢ2，柵ＳＡ20を検出した。ＳＤ10は幅２ｍ，深さ1.2ｍの溝で，発掘区内での検出長は37ｍにおよぶ。埋土に13～14世紀の遺物を含む。この溝ＳＤ10の東では13～14世紀の土壙墓を，西では四脚門のある柵と，堀で囲まれた邸宅を検出し，この溝を境に土地利用形態がまったく異なることが判明し，溝ＳＤ10と四脚門ＳＢ２の間に南北の道があると判断した〔五十川・飛野84〕。この道の直上で同じ方位をもつ近世の道ＳＦ１を検出している。この道は『増補再板京大繪圖』(寛保元(1741)年刊)や，仮製２万分１地形図(明治25年製)にも記載

されており，この道は古代末以来，近代まで連綿と存続していたことがわかる。

この南北の道が尊勝寺の東側を通る道の延長部分，すなわち今朱雀にあたると考えられる。図25—C地点(図22—A地点)の築地と側溝跡と，溝ＳＤ10を結ぶと，方位を真北から東に約0°40′振った軸線を得ることができる。図25—Ｂ地点の調査で，南北約15ｍにわたって検出した溝Ｓ２〔南ほか 89〕はこの直線上に位置し，この道の存在を裏付ける。溝Ｓ２はやや削平を受けたものか，幅1.1ｍ，深さは0.1～0.2ｍであり，埋没した時期は13世紀後半と考えられている。

なお，四脚門ＳＢ2と溝ＳＤ10の間は約7ｍであるが，邸宅にともなう遺構は13～14世紀のものであり，巷所として道が狭められたと思われる。道路の西半に井戸が掘られたり，溝が埋まったのもこの時期と考えられる。

(2)　本部構内ＡＴ27区溝ＳＤ３と道ＳＦ３

本部構内ＡＴ27区の調査（図25—Ｄ地点，図26中段）で，溝ＳＤ３と道路状遺構ＳＦ３を検出した〔五十川81〕。ＳＤ３は幅2.5ｍ，深さ1.5ｍ，断面Ｖ字形の溝で，発掘調査区内では真北からやや東にふるが，北約110ｍの地点でこの溝の延長部分と思われる溝を検出しており，ほぼ真南北の溝と考えられている。溝の廃絶は上層の遺物から13世紀と考えられる。また，この溝の西約11ｍの所で，東西1.4～2.2ｍ，南北8.6ｍにわたって路面と考えられる堅い面を検出した。この面上には幅

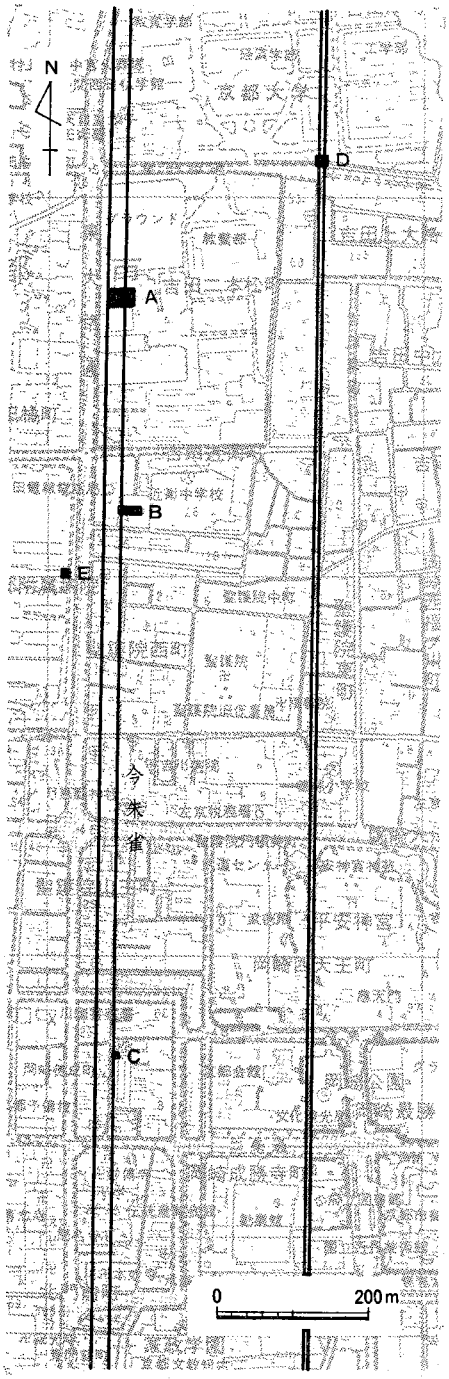


図25　白河の条坊の南北路　縮尺1/10000

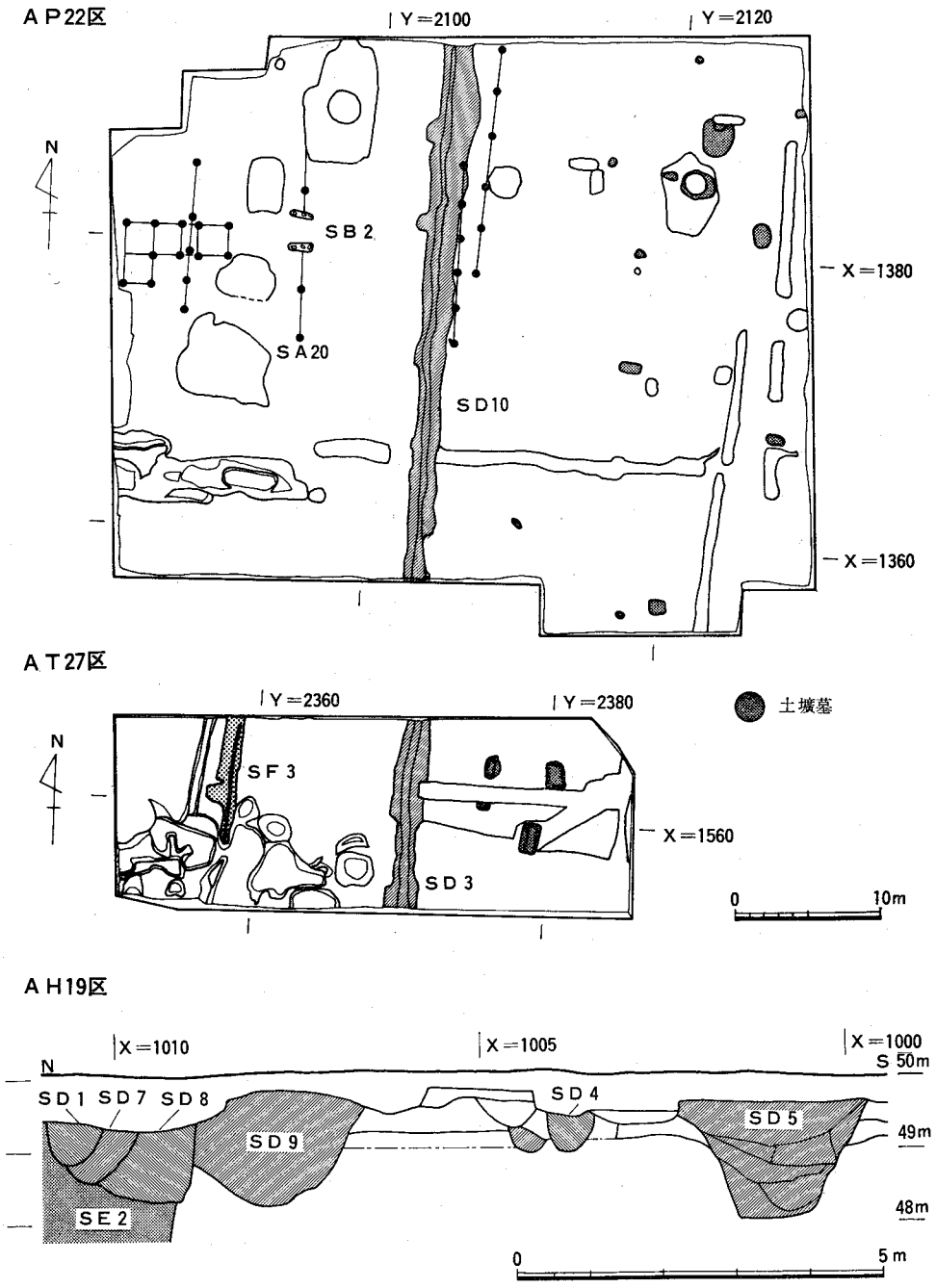


図26　京都大学構内検出の遺構

0.2mの轍と思われる細い溝が南北に走る。

この南北の道が，方位，今朱雀との距離などから，今朱雀の東2本目の南北路，すなわち尊勝寺の東を限る道の延長部分にあたると考えられる。

図25—D地点で検出した南北路と尊勝寺の東側の道を結ぶと，今朱雀と同様に方位を真北から東に約0°30′振った軸線を得る。ところが本部構内の南では，この線上に現在の道が約1kmにわたって続く。この道は，『新撰増補京大繪圖』(元禄4(1692)年刊)をはじめ，近世の古図によく描かれている道であり，また，D地点でも道路SF3の上層でわずかに位置は異なるものの，近世の道路遺構を検出しており，今朱雀と同様に古代末から現代まで，道路として使用されてきたと考えられる。

(3) 病院構内AH19区溝SD5とSD9

京都大学病院構内AH19区の調査(図25—E地点)〔京大遺跡調査会88〕で，東西に走る7本の溝を検出した(図26下段)。溝SD1が江戸後期の遺物を含むほかは，14世紀の遺物を含む。なかでも溝SD5と溝SD9は，ともに幅2.0m，深さ0.7m，底幅1.1mの断面が逆台形を呈する丁寧なつくりの溝である。溝が集中することや，この位置に旧吉田村と旧聖護院村の字境界が一致することから，これらの溝は道路にともなうものと考えている。道は『元禄京都　洛中洛外大絵図』[19]にも描かれており，前述してきた道と同様に古代末以来の道が踏襲されていたものと考えられる。

4　造営尺と方位

以上のような遺構をもとに白河の条坊地割の復原を試みる。

(1) 造営尺について

平安京の造営尺については諸先学の多数の論文があるが，結果的には杉山信三の提唱した0.987現尺(約0.2991m)〔杉山64〕で，大きな齟齬を生じない。白河の条坊地割の造営尺については，2次にわたる法勝寺金堂の調査から算出した0.303m〔梶川77c〕や，尊勝寺の五大堂に比定される遺構から算出した0.3014m〔工楽・藤村73〕，尊勝寺の九躰阿弥陀堂の東西規模25.56m＝85尺から算出した0.3007m〔上村81〕など，個別の遺構から推定されているだけであるが，いずれにしても現尺から大きくはずれるものではない。

こうした造営尺を念頭におきながら条坊の復原を試みる前に，条坊地割の基準線となる築地の中心線と側溝の位置関係について述べる。『延喜式』[20]には，平安京の東西・南北の幅や，大路・小路の規格などが記されている。その中で大路は幅が8丈でも10丈でも「自

二垣半一至二溝邊一各八尺　垣基三尺　犬行五尺　溝廣各四尺」，小路は「自二垣半一至二溝邊一各五尺五寸　垣基二尺五寸　犬行三尺　溝廣各三尺」とある。築地の中心線から「犬走り」をはさんで，溝の中心線までなら，大路で1丈，小路で7尺であったことがわかる。白河の大路・小路の規格が平安京と大きく異なっていたとは考えられず，また，条坊全体を検討するにはあまり大きな影響をおよぼさないので，溝から犬走りと築地塀の中心線までの距離は延喜式の数値に準拠した数値，すなわち大路で1丈，小路で7尺として条坊地割の復原を試みる。

前述した白河の条坊地割にともなう遺構と考えられるものから，条坊の造営尺を算出してみたい。まず，溝ＳＤ３（図25—Ｄ地点）と溝ＳＤ10（図25—Ａ地点）の間隔約267ｍが，２町＋小路２本（88丈）とすると，１尺＝0.3034ｍとなる。また，尊勝寺の西の築地（図22—Ａ地点）と法勝寺の西を限る道の東側溝（図21—Ａ地点）の距離に法勝寺西側の築地までの距離を加えると，都市計画図（1/2500）の上で約534ｍを測る。街区を40丈四方とし，法勝寺の西の道を８丈の大路とすれば180丈，小路とすれば176丈がこれにあたり，１尺＝0.2967ｍと１尺＝0.3034ｍをえる。法勝寺の西を限る道が大路であるか，小路であるかは不明であるが，大路であるなら冷泉小路末と同様に変則的な町割がおこなわれ，大路が街区の部分を削り込んでいた可能性もある。

南北方向では溝ＳＤ５（図26）の南に築地を想定し，図21—Ｃ１地点の築地と距離を測ると約575ｍをえる。この間を４町＋大路２本＋小路２本（188丈）とすると，１尺＝0.3059ｍとわずかに長い数値となるが，前述したように冷泉小路末は４丈より広かったと考えられるが，仮に２丈広かったとすると１尺＝0.3026ｍを得る。

以上のような結果から，白河の条坊の造営尺は現尺と同じ0.303ｍに近い値をとると考えられる。いずれにしても，造営尺を算定する基準となり得る遺構の発見例が少なく，また，大路・小路や街区の幅に，条坊地割としての整合性を欠いた部分があった可能性もあり，今後の発掘調査が待たれる。

(2)　方位について

個別の遺構の方位は，法勝寺金堂の真北から西に0°11′40″〔梶川77ｃ〕や，尊勝寺九躰阿弥陀堂の真北から東に0°59′59″〔上村81〕，尊勝寺五大堂の真北から東へ0°22′～0°42′〔工楽・藤村73〕，尊勝寺金堂の回廊付近は真南北，東塔は真北から西に2°50′20″振る〔杉山・岡田61〕などの報告がある。検出範囲の狭いことや，遺構の年代差によって多少の差があることなどから，わずかずつ違った方位が示されている。

ここでは図25—A地点とC地点や，D地点と尊勝寺の東辺のように，南北約1㎞離れた地点を基準として算出した。結果としては，真北から東に0°30′～0°40′偏った方位がとられたものと推定できる。

(3) 条坊地割の範囲について

白河の条坊地割の骨格は，今朱雀を中心に東西に4町ずつとし，南北路は今朱雀と法勝寺の西の道を大路とし，各町間の道を小路とし，これに法勝寺が東につきでていたとする福山敏男の案〔福山43〕で大きな齟齬をきたさない。

大治2(1127)年，法勝寺の西側の大路が神楽岡まで延長されたことは前述した。このことから白河の条坊地割が，北は吉田山のあたりまでおよんでいたことは確実視されていたが，図25—D地点の溝が条坊地割の遺構と判明したことから，白河の条坊地割は洛中と同様に，一条大路まであったものと考えられる。南については今後の課題である。

5 おわりに

以上のような調査結果や考察のほかに，宇境界や古道も考慮し，白河街区の復原図を作成した(図版7)。基本的には，南北の道は4町おきに，東西の道は2町おきに大路がある洛中と同じ型式をとっていたと考えられる。ただ，条坊地割を施す前に法勝寺があったため，法勝寺西大路や冷泉小路末などにやや変則的な部分が生じたほか，全体としても洛中よりやや北によったものになったと考えている。条坊地割を意識して町割を始めたのは法勝寺造営以後で，尊勝寺の造営以前のことであろう。

なお，この図は方角地割の基本型を示したもので，六勝寺や院の御所などの占地の詳細については今後の課題としたい。

本稿作成にあたっては，梶川敏夫氏（京都市埋蔵文化財センター），上村和直氏・堀内明博氏（京都市埋蔵文化財研究所）をはじめ，多くの方々の御教示を賜わった。末筆ながら，各位に謝意を表します。

〔注〕

1 『栄華物語』巻三十九　布引の瀧（『日本古典文学大系76』所収）

2 『愚管抄』巻四「白河ニ法勝寺タテラレテ、國王ノウヂデラニコレヲモテナサレケルヨリ、代々ミナコノ御願ヲツクラレテ六勝寺トイフ白河ノ御堂、大伽藍ウチツヅキアリケリ」（『日本古典文学大系86』所収）

3 『平家物語』巻七維盛都落「京白河に四五万間の在家、一度に火をかけて皆焼拂ふ。」（『日本古典文学大系33』所収）

4 白河街区に関する考察は，古くは森幸安の「中古京師内外地図」(1748年）にはじまり，おもなも

のだけでも，「六勝寺の位置について」〔福山43〕，「白河御堂」〔杉山62〕，「六勝寺と鳥羽殿」〔村井71〕，「京都大学構内遺跡と京・白河」〔岡田79〕，「六勝寺の伽藍とその性格」〔清水85〕などがあげられる。

5 『鯨珠記』大治2(1127)年7月10日条「法勝寺西門ヨリ神樂岡ニ至ル大路成ル」(『史料綜覧』収所)

6 京都市動物園医療・救護センター施設新築工事に伴う発掘調査で検出したもので，京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏にご教示頂いた。

7 RITZ OKAZAKI 新築工事に伴う発掘調査で，京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏にご教示頂いた。

8 『明月記』建保元(1213)年4月25日条に「二條東古来被憚路也」とあり，二条大路末を東に直行することは，憚るべきこととされていた。『中右記』康和4(1102)年7月20日条には，「經大炊御門，東洞院，二條大路，并御願寺西北東大路，從法寺西大門」とあり，堀河天皇は法勝寺行幸の際に尊勝寺の西，北，東大路を迂回している。

9 昭和62年度に実施された店舗増築工事に伴う調査で検出した溝で，京都市埋蔵文化財センターの梶川敏夫氏と京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏に御教示を頂いた。

10 京都市埋蔵文化財研究所の堀内明博氏に御教示頂いた。

11 半井本『保元物語』「左大臣殿上洛の事」

12 江戸時代の国学者伴信友が『東寺百合文書』から写した『東寺古文零聚』に収める。

13 『吉記』寿永3年4月15日条「崇徳院，宇治左大臣，爲崇靈神，建仁祠，有遷宮，以春日河原爲其所，保元合戰之時，彼御所跡也」(『史料大成』所収)

14 『源平盛衰記』彌巻 第四十一 元暦元(1184)年4月15日条「崇徳院遷宮あり。春日が末北河原の東也。此所は大炊殿の跡，先年の戰場也。」

15 『百錬抄』平治元(1159)年3月22日条「白河千躰阿弥陀堂供養。大炊御門北。讃岐院御所。保元戰場爲灰燼之跡。佛者鳥羽院令造立給。爲彼御追福也。」

16 『百錬抄』嘉禎3(1237)年4月27日条「粟田宮遷坐東方地。本所近河邊。依有洪水恐所奉遷也。」

17 「東寺百合文書ケ函 五十九之六十二」

18 粟田宮の社地は上西門院御領であった(『吉記』寿永3(1184)年4月15日条)。女院高岸の名もこれに由来するものか

19 慶應義塾大学図書館蔵(白石克編『元禄京都 洛中洛外大絵図』1987年所収)

20 『延喜式』巻四十二「左右京職」(『国史大系』第拾参巻所収)

〔参考文献〕

五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内ＡＴ27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』

五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』

井上満郎 1989年 「院政期における新都市の開発」『中世日本の諸相 上』

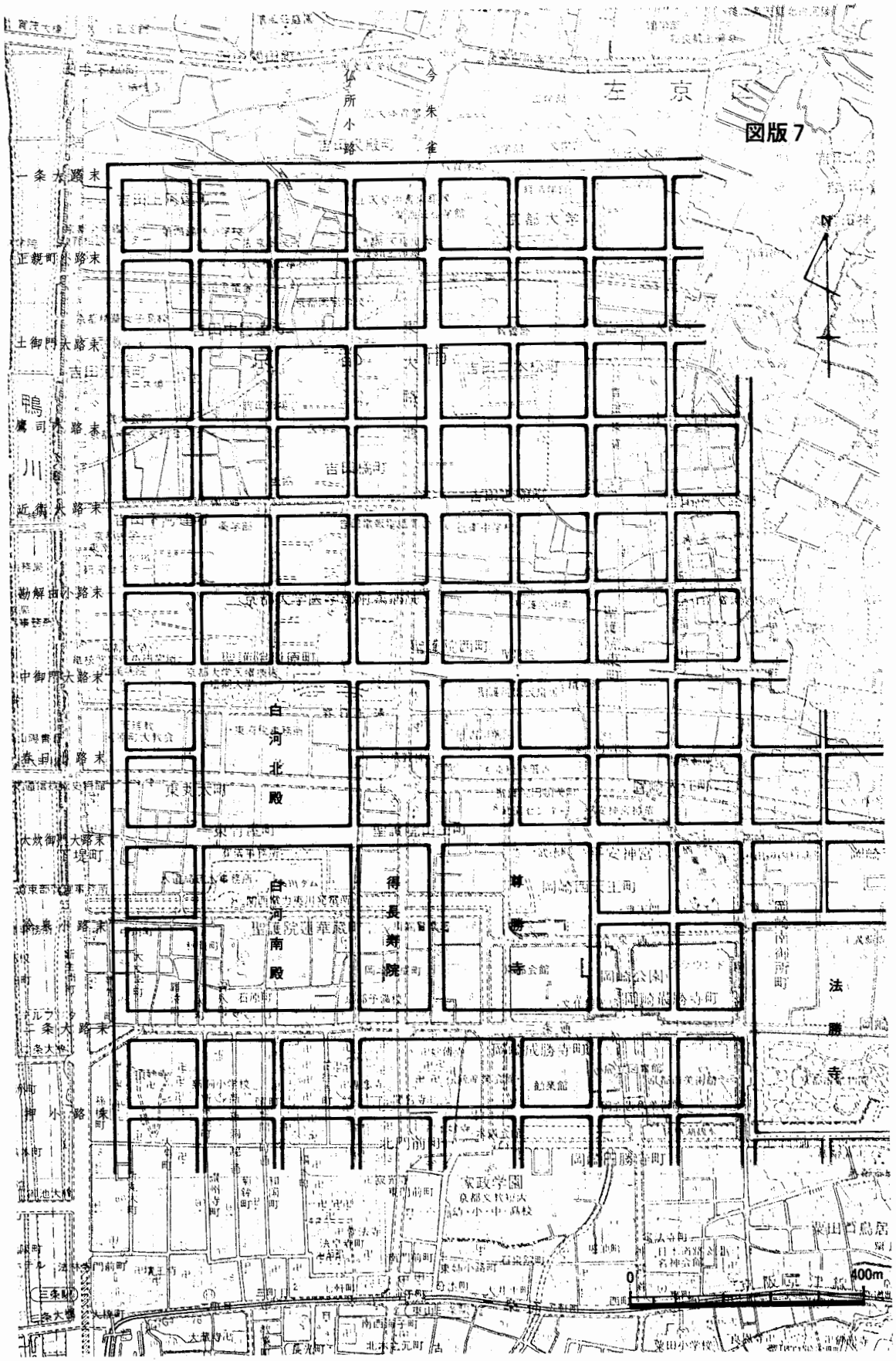
上村和直 1981年 「六勝寺跡Ａ・Ｂ調査区」『六勝寺跡発掘調査概要 昭和55年度』

1983年 「白河北殿跡」『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和56年度』

岡田保良 1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』

岡田保良・宇野隆夫 1978年 「京大病院遺跡ＡＦ14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』

梶川敏夫　1976年　「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告　1975』
1977年a　「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告　1976—Ⅱ』
1977年b　「尊勝寺推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1976—Ⅱ』
1977年c　「法勝寺跡」『仏教芸術』115号
川上　貢　1977年　「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度」
木村捷三郎・畑三樹徳・上原真人　1975年　「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告　1974—Ⅱ』
京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
1988年　『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—AH19区発掘調査現地説明会資料—』
工楽善通・藤村　泉　1973年　『尊勝寺跡発掘調査概報』
清水　擴　1985年　「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号
杉山信三　1962年　『院の御所と御堂 —院家建築の研究—』(『奈良国立文化財研究所学報』第11冊)
杉山信三　1964年　「平安京の造営尺について」『史迹と美術』第342号
杉山信三・岡田茂弘　1961年　「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第10冊
杉山信三・梶川敏夫　1975年　「法勝寺金堂跡発掘調査概報」『京都市埋蔵文化財年次報告　1974—Ⅱ』
西岡虎之助　1976年　『日本荘園絵図集成　上』
西田直二郎　1925年　「法勝寺遺趾」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊
林屋辰三郎　1960年　「法勝寺の創建」『歴史における芸術と社会』(『古典文化の創造』1964年所収)
福山敏男　1943年　「六勝寺の位置について」『美術史学』81・82号
1977年　「中世の神社建築」『日本の美術』No. 129
南　博史・定森秀夫・植山　茂・野口　実　1989年　『吉田近衛町遺跡』(『京都文化博物館調査研究報告』第4集)
村井康彦　1971年　「六勝寺と鳥羽殿」『京都の歴史　2』
辻　祐司・上村和直　1987年　『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』



白河の条坊地割の復原案